第３章

宮城県における東日本大震災震災遺構調査報告

樋口義治　西堀喜久夫　阿部聖

１．はじめに

本調査報告は、愛知大学中産研研究プロジェクト『地域と大学における災害と防災教育』の一環として、東日本大震災に関する宮城県の震災遺構調査としてなされたものです。

これまで本研究チームは、中産研の共同研究として、南海トラフ大地震を想定しながら、東日本大震災の調査研究、大規模災害における地域連携、防災政策としての事前復興政策、大学 BCP と地域連携、自主防災組織の現状と課題、避難所運営の社会実験などをテーマに研究し、成果を公表してきました。

これらの成果を踏まえ、地域と大学における防災意識の向上と防災教育に向けた実行可能なプログラムを作成することが、本研究の目的となります。そのため、震災遺構が災害教育にどのような影響を与えるのかを考察するため、2011 年 3 月に発生した東日本大震災の遺構、遺物が、どのように活用されているのかを調査しました。

災害遺構とその活用について『平成 28 年度版　防災白書』（内閣府　防災情報のページ）によりますと、災害遺構等とは、過去に災害で被害に遭われた方々が、その災害からの教訓を将来に残したいという意図で残された構築物、自然物、記録、活動、情報等のことを指します。

例えば、岩手県宮古市では、昭和三陸地震（昭和 8 年：1933 年）の津波被害の教訓を刻んだ石碑が建てられていますが、その後、この石碑より高い場所に住居を構えた住民は、東日本大震災の津波による建物被害を免れました。このように、過去の災害で残された災害遺構等を通じて得られる教訓を次世代に受け継いでいくことは、災害被害を軽減する上で重要なことです。

また、災害遺構等は地域の身近なところに存在しているケースが多く、当該地域に予想される災害を知る上でのきっかけとなることも多いといいます。

災害遺構事例

ここで、内閣府の「災害遺構」の収集及び活用に関する検討委員会による、資料と

して公表されている、災害遺構の事例リストを以下に示します。

災害遺構等事例リスト

「災害遺構」の収集及び活用に関する検討委員会　第１回会議資料３　事例の収集例

１．静岡県浜松市細江町細江神社「祇園祭」

２．徳島県海陽町の大岩慶長宝永地震津波碑

３．宮崎県・外所地震の供養碑

４．印南町の津波記録と印南中学校における教育実践

５．和歌山県白浜町の飛鳥神社祭礼における「津波警告板」の活用

６.八重山地震津波をめぐる伝統祭祀ナーパイ、慰霊祭

７．寛政の津波供養碑

８．おなり神（雷神碑）

９．安政南海地震津波碑「大地震両川口津浪記」の墨入れ行事と地蔵盆

10. 津波祭での「土盛」

11. 長崎市太田尾町山川河内地区「念仏講まんじゅう」

12. 第一次室戸台風被災慰霊祭

13. 平和池

14. あの日を忘れない～伊勢湾台風の災害を語る会～

15.「伊那谷三六災害」有線放送・記念誌、演劇、歌舞伎、記録文集等

16. 伊那谷遺産（池口崩れ・小道木（こどうぎ）の埋没木）

17. 地すべり資料館

18. 区民参加型「命を守る」防災ワークショップ

19.「子供水防団活動」――自分の身は自分で守る

20. 天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会

21. 狩野川台風の記憶をつなぐ会

22. 津波ディジタルライブラリィ

23. 津波痕跡データベースシステム

24. 四国防災八十八話

25. 四国災害アーカイブス

26. 三重県地震碑・津波碑の集成『いのちの碑』
27. 水害情報発信―水害の記録と記憶―（滋賀県 HP）
28. 明治 29 年 6 月 15 日の津波記念碑
29. 岩手県宮古市姉吉地区津波記念碑・昭和八年津波 50 回忌供養
30. 昭和８年３月３日の津波記念

これらについて細かい解説が紹介されています。

２．東日本大震災、宮城県震災遺構（災害遺構）調査

こうしたことから、災害遺構の存在は「災害教育」にとって重要な素材となることは明白です。そのため、今回、東日本大震災後の宮城県における震災（災害）遺構が現在どのような状態で保存され、どのように利用されているのかを、直接現地で調査することとしました。

なお、本稿で使用している写真は全て調査者が現地で撮影したものです。

(1) 調査概要

・調査時日　2023 年 11 月 24 日（金）～ 27 日（月）
・調査者　阿部聖、樋口義治、西堀喜久夫
・調査スケジュール
11 月 24 日（金）調査対象：震災遺構 仙台市立荒浜小学校
11 月 25 日（土）調査対象：女川町　旧女川交番
11 月 26 日（日）調査対象：気仙沼市東日本震災遺構・伝承館（旧気仙沼向洋高校）、杉ノ下高台、南三陸町旧防災対策庁舎、南三陸さんさん商店街、石巻市震災遺構大川小学校、石巻市震災遺構門脇小学校、東松島市震災遺構旧野蒜駅プラットホーム
11 月 27 日（月）震災遺構調査：名取市震災復興伝承館

(2) 調査

調査ルートの概要を図１に示しました。仙台市から気仙沼市までを車で往復して、国道 45 号線沿いの震災遺構を調査しました。

図１　調査ルート（Google マップより）

図２　仙台駅から震災遺構
仙台市立荒浜小学校までのルート

11 月 24 日

1）震災遺構 仙台市立荒浜小学校

概要　荒浜小学校は仙台市中心部から約 10km 離れた太平洋沿岸に位置する仙台市若林区荒浜地区にあり、海岸線に沿って流れる歴史ある貞山運河周辺には、約 800 世帯、約 2,200 人が定住していました（図 2）。2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災において、そこを最高 9 メートルの津波が襲い、当日周辺にいた人を含む 186 人が亡くなりました。

荒浜小学校は明治 6 年に設立され、海岸線から約 700 メートル内陸に位置し、震災前には 91 人の児童が通っていました。地震発生直後、鉄筋コンクリート 4 階建ての校舎は住民、生徒、教職員ら 320 人の避難場所となりました。津波は 2 階まで押し寄せ、校舎に避難していた全員は屋上まで無事に避難しました。

二度と津波の犠牲にならないことを目標に、市民が学んだ教訓を伝え、津波の本当の脅威を次世代に伝えるために、荒浜小学校校舎跡は保存されることになりました（写真１、２）。そこでは、地震発生からその後の避難、津波の規模、そして被災までの様子を写真や映像で見て、災害への備えの大切さを学ぶことができます。屋上からは荒浜一帯を見渡しながら、震災前と後の景色を比較することができます（仙台市 まちづくり政策局 防災環境都市推進室『震災遺構 仙台市立荒浜小学校』という小パンフレットその他による）。

写真１　荒浜小学校校舎

写真２　津波到達線２階

写真３　震災前の荒浜（「失われた街」模型復元プロジェクト）

写真４　当時の説明（ボランティア）

「失われた街」模型復元プロジェクトは地域に育まれてきた街並みや、人々の暮らしの下で紡がれてきた記憶の保存・継承を目的としたプロジェクトです（記憶の街ワークショップ in 荒浜　神戸大学 棚橋修、写真３、４）。

写真５　学校屋上からの荒浜地区
海に向かって何もない

屋上からもわかりますが、荒浜地区を訪れると小学校を含めて海岸線まで、広々とした平野ですが住宅などは何もありません。工事などの建物ぐらいで、ここにかつて住宅が並んでいたとは思えない状態です。津波の結果すべての建物が流されたと思われます（写真５）。

荒浜小学校には、調査当日寒い日ではありましたが、訪問者がかなりいました。私たちの見学している最中にも大型バスも着いて、多くの人が２階まで残された校舎の惨状や、３階の展示や被災時の校長先生の話を聞いていました。また、被災時の荒浜小学校の教員や児童のインタビュー動画

などにより、震災当時の状況や彼らのその後について被災時の感情を含めて知ることができました。震災時に屋上に逃げたが周りから孤立し、結局自衛隊のヘリコプターで避難することができたという、屋上のヘリコプターに釣りあげられた場所なども説明を受けました。

防災教育　防災教育の観点からは、当日もかなりの訪問者がありましたが、震災遺構としてこの荒浜小学校が2023年４月に開館してから、2023年８月までに６年５か月で来館者50万人を超えたということで、充分防災教育の効果が上がっていると思われます。

11 月 25 日

２）女川町　東日本大震災震災遺構旧女川交番

写真６　旧女川町立病院
（現女川町地域医療センター）

概要　女川町は図３の大川小学校の南に位置します。東日本大震災において女川町を襲った津波は、最大津波高 14.8 m（最大浸水高 18.5 m、最大遡上高 34.7 m）の大きさで、港のみならず、海抜 16m の高台にある女川町立病院（現在の女川町地域医療センター）の１階天井近くまで達しました。病院入口の階段上の横線は津波が到達した高さを示しているのでしょう（写真６）。このため、女川駅をはじめ町の多くが水没しました。被害は人口約１万人の内、死者・行方不明者は 827 名で、住宅も 3,900 棟が被害を受けました〔女川町「震災復興のあゆみ」（town.onagawa.miyagi.jp）より〕。また、近くの東北電力女川原子力発電所は敷地高さ 14.8m であり、津波は 13m まで発電所に迫りました。

震災遺構として、女川町では、被災施設の、メモリアル遺構としての保存を検討した結果、旧女川交番を震災遺構として保存することとしたようです（写真 7）。写真からわかるように、いったん海中に没した旧女川交番は、引き波により土台部分から引き抜かれ、移動して今のような状況になったものと思われます。

防災教育　女川町は三方を山地に囲まれ、港・海に向かって三角形の底辺が広がって行くような狭い土地です。津波が来れば容易に三角形の頂点に向かって駆け昇って

写真７　旧女川交番

いく様子がわかります。2012 年にも調査しましたが、震災後何もなかった状態が、駅を含め住宅なども新開地のように高台に向かって復興していました。震災遺構としては旧女川交番を保存しています。旧交番をぐるっと回って見て回ることができるようになっています。

11 月 26 日

調査地地図　11 月 26 日（日）の調査地の地図及び行程を図 3 に示します。

図３　調査ルート（Google マップより）

３）気仙沼市　東日本震災遺構・伝承館（旧気仙沼向洋高校）

概要　気仙沼市の東日本大震災被害状況（令和 5 年 8 月 31 日現在）は気仙沼市の HP〔被害の状況 - 気仙沼市役所（kesennuma.miyagi.jp）〕によれば、人的被害（被災

地ベース）は 1,434 人（内訳：直接死 1,109 人、関連死 111 人、行方不明者 214 人）で、住宅被災棟数は 15,815 棟（平成 26 年 3 月 31 日時点）、被災世帯数は 9,500 世帯（平成 23 年 4 月 27 日時点・推計）です。

各市町に一つ残すことが可能となったことから、気仙沼市においては、東日本震災遺構・伝承館（旧気仙沼向洋高校）として残すこととしました。

この、気仙沼市東日本大震災遺構･伝承館は、将来にわたり震災の記憶と教訓を伝え、警鐘を鳴らし続ける「目に見える証」として活用し、気仙沼市が目指す「津波死ゼロのまちづくり」に寄与することを目的としているといいます〔気仙沼市　東日本震災遺構・伝承館 HP（気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（kesennuma-memorial.jp）〕。

写真８　旧向洋高校を外から撮影

写真９　旧向洋高校内部

写真８は旧向洋高校を横から見たものです。津波は校舎の４階まで到達したそうです。内部は当時のまま残されているところがあります（写真９）。隣に伝承館が建てられていて、災害関係のセミナーや研修等ができるようになっています（写真 10）。

防災教育　この施設の開館は９時半からで、私たちは９時半前に着きましたが、既に数台の車が待機していました。10 時半における駐車場車台数計測では小型車 25 台、

写真 10　東日本震災遺構・伝承館

写真 11　駐車場

大型バス 2 台が駐車していました（写真 11）。日曜日でしたが、この気仙沼市東日本震災遺構・伝承館には、震災後 12 年を経過していますがそれなりの訪問客がいるようで、震災遺構・伝承館としての役割を果たしているようでした。

防災教育（学習）の内容として「語り部ガイド:90 分」、「防災セミナー:60 分～ 90 分」、「防災・減災講座」、「ふりかえりワークショップ」などもあり、防災教育施設として機能しています。

旧向洋高校は震災時の当時の様子の保存と見学が主でした。震災伝承館では、まず映像シアターを見ましたが、津波の実写とみられる迫力ある映像を見ることができました。その後は校舎の見学を行いました。

4）杉ノ下高台（指定避難場所で起きた悲劇）見学（東日本大震災杉ノ下遺族会　慰霊碑）

概要　気仙沼市東日本震災遺構・伝承館を出発して、予定にはなかったのですが旧向洋高校から南の海辺の方向に、「命山」のようなものが見えるので行ってみました。そこには写真 12 のように杉ノ下高台（現在は気仙沼市の防災広場）とその下に、杉ノ下高台（指定避難場所で起きた悲劇）の慰霊碑（写真 13）が建っていました。

気仙沼市階上地区南端にある杉ノ下地区（旧気仙沼市波路上杉ノ下）は、東日本大震災の大津波により、集落 85 世帯全戸が流出し住民 312 名中 93 名が犠牲となったということです。この命山とも見える高台は杉ノ下高台と呼ばれ、高さ 10m あり、津波の避難場所にもなっていました。また、明治 29 年の明治三陸大津波の時にも津波は来ませんでした。しかし、東日本大震災においてこの場所に避難した 60 名は、想定外の津波の犠牲者となりました。地区の被害者は 93 名でした。そして、この地区の全家屋は取り壊され地区は無くなったのです。今はこの地区に一つも建物は無くなっていま

写真 12　杉ノ下高台上部

写真 13　東日本大震災杉ノ下遺族会 慰霊碑

す。

写真 13 の慰霊碑は表に「絆」後ろに「東日本大震災の爪痕」の表題の下に文言と犠牲者 93 名の名前が彫られています。背後の文言は以下の通りです。

東日本大震災の爪痕

平成二十三年三月十一日（金）
午後二時四十六分

マグニチュード九・0
津波の高さ　十八メートル

千年に一度と言われる大地震と
巨大津波に襲われた杉ノ下地区は
壊滅的な被害を受けた

地区民三百十二名、八十五世帯の
家屋は、巨大津波に飲み込まれて
土台を残してすべて流失

七十五世帯、二百十九名が
避難生活を余儀なくされた

平成二十三年十二月十日
残されていた全壊家屋が取り壊され
杉ノ下地区から全ての家屋が消えた

この悲劇を繰り返すな
大地が揺れたらすぐ逃げろ
より遠くへ…より高台へ…

（杉ノ下地区・慰霊碑）

防災教育　この碑は偶然に発見したのですが、想定外の津波高で、指定避難場所であるにも関わらず、この場所に避難した人々は全員死亡したとのことで、その無念さがにじみ出ているようです。同時に、学術、行政機関が想定し設定した避難場所で遭難したことは、今後の様々な想定や防災に大きな問題を投げかけていると思われます。この「杉ノ下高台の悲劇」は、例えば「大川小学校の悲劇」ほど世間に知られていませんが、よく調べる必要があると思われます。

この地区は市の避難場所で遭難したことに対しての訴訟について、「私たちは市と何度も検討を重ね、あの小高い丘の上を避難場所と決めました。責任は市にだけあるわけではありません。市を訴えるということは、私たち自身を訴えることにもなります。ですから訴訟は起こしません。」〔「防災のことなら DMA」（https://dma-fmiura.com/entry58.html）〕ということのようですが。

ただ、明治三陸大津波においては、階上村波路上杉ノ下地区では犠牲者は出なかったのですが、さらに海側で隣接の階上村波路上明戸地区では多くの犠牲者を出しました。これは明治三陸大津波の被害データにおいて、階上村で 437 人が亡くなっていることから、この多くは明戸地区の人たちであったと考えられます。この時、階上村波

路上杉ノ下には津波高 5.6m が記録されています（山下、2008）。杉ノ下高台は約 10m であり、確かに明治三陸大津波には耐えたと思われます。しかし、東日本大震災におけるこの杉ノ下地区の津波高は、13m であったと想定されますので、この杉ノ下高台を３ｍも超えることとなりました。この結果、２つの大地震・津波により、波路上杉ノ下と明戸地区から住宅や住民が現在誰もいなくなるという結果となりました。

５）南三陸町旧防災対策庁舎、震災伝承施設「南三陸 311 メモリアル」、南三陸さんさん商店街、南三陸町震災復興祈念公園

概要　宮城県北東部で、三陸海岸の南に位置する南三陸町は、東日本大震災による巨大津波にのみ込まれ建物の６割超が全半壊し、防災庁舎にいた町長をはじめとして、死者・行方不明者は約 830 人に上りました。津波襲来に際して、防災庁舎において町民に避難を呼びかけ自らは亡くなった職員の話は、悲劇として語られています。現在は遺構として残された「南三陸町旧防災対策庁舎」（写真 14）、東日本大震災による記憶と教訓を伝えるために設立された〔震災伝承施設「南三陸 311 メモリアル」〕（写真 15）、そして、道の駅として整備されにぎわっている「南三陸さんさん商店街」（写真

写真 14　南三陸町旧防災対策庁舎

写真 15　震災伝承施設
「南三陸 311 メモリアル」

写真 16　南三陸さんさん商店街

写真 17　南三陸町震災復興祈念公園

16)、「南三陸町震災復興祈念公園」（写真 17）がセットとなり、全体として震災からの復興と震災の悲劇を忘れない一体形となっています。

防災教育　南三陸町は東日本大震災によって壊滅的な被害を受けました。そして、町庁舎をはじめ多くの施設が高台に移転しました。かつての街中心部は復興祈念公園などとなり、かつ、道の駅として仮設的ですが商店街を建て、観光客などでにぎわっていました。震災遺構としては、防災庁舎をそのまま残していて、防災教育の効果はあります。防災教育も人の学習であるので、人を現地に呼んではじめてなりたつものであり、こうした幹線道路沿いに震災遺構と商店街を組み合わせるやり方も評価できます。

6）石巻市震災遺構大川小学校

概要　東日本大震災において、もっとも悲劇的とされたのがこの石巻市立大川小学校です。石巻市釜谷地区にあった大川小学校は、東日本大震災において北上川を遡上してきた津波によって、当時学校にいた児童 78 名と教職員 11 名、合計 89 名中 84 名が死亡しました。なぜ地震後 50 分間校庭にとどまったのか、何故裏山に逃げなかったのかなど、教育委員会の隠ぺい体質もあり、この大川小の悲劇は事件となり、民事裁判にもなり遺族側が勝訴しました。

写真 18　遺構として保存された旧大川小学校

ただ、この地区では大川小の児童、教職員の犠牲が喧伝されますが、同時に大川小の位置した釜谷地区では 130 余の世帯の内 200 名弱が犠牲になっています。家屋は全て流されてしまいました。大川小に避難してきた地域住民も多数亡くなったのです（写真 18）。

この場所には「大川震災伝承館」が設置されています。写真 19 は釜谷地区の住宅、その他駐在所などの施設を示しています。この中で、大川小学校の児童、教職員は新北上川橋の手前で津波に飲まれたのです。

防災教育　大川小では、裏山に登れなかったのかということが争点となりましたが、確かに校庭のすぐ裏に位置するこの山に登れば助かったでしょう。しかし、校長不在

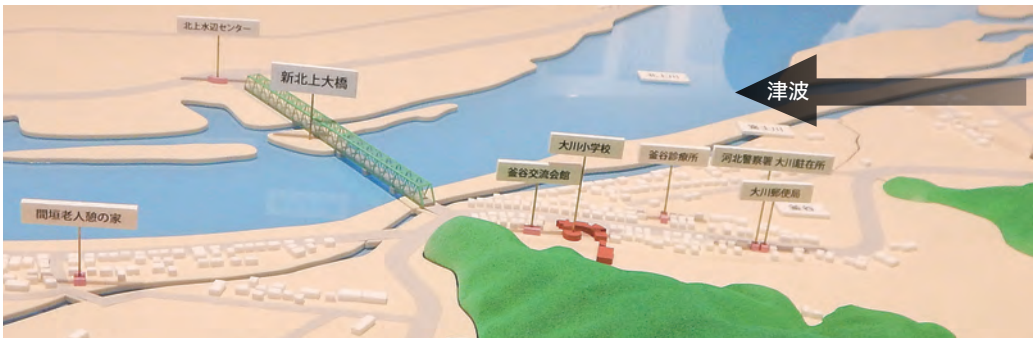

写真 19　大川震災伝承館に展示してある震災前の北上川、大川小学校、付近の住宅等地図模型

で教頭に確定的な権力があったかや、老人を主とする地元民も大川小に避難していて、彼らも裏山に登らず津波に飲まれたことなど、50 分という時間があったとしても難しい事態であったということは想像できます。とはいえ、多くの児童が亡くなったことは今後の防災に大きな教訓を残したのでしょう。

大川小学校の悲劇は、公営学校管理下の災害としては例を見ない被害者の多さであり、指導者の決断の遅滞、同調圧力、思い込み、事前のハザードマップの不備など様々の問題を提出しました。

ただ、著者はこの大川小学校調査は 3 度目ですが、以前には入ることができた被災校舎に入ることができなくなったことや、地区住民を含む犠牲者の氏名碑などが見えなくなった（学校から離れたところに移されたようでした）ことなど、全体としてこの地の震災記憶の風化を望む空気を感じました。しかし、悲劇の対象が児童であり、今後も語り継がれ、防災教育の対象となっていくことと思われます。

7）石巻市震災遺構門脇小学校

概要　石巻市門脇小学校は、東日本大震災発災時、全校児童 300 人のうち 240 人が校内に残っていました。地震直後より避難訓練通りに教師の誘導のもと、下校後戻ってきた児童を含めて 275 名の児童が裏山の日和山に避難しました。また、津波到達により、校舎に残っていた 40 人の住民と職員も山に避難しました。

門脇小学校校舎は、津波と津波火災の被害状況を残している全国唯一の震災遺構です（写真 20、21）。この被害状況は外部通路から見学できます。1 階は、津波と津波火災。2 階、3 階は津波火災の被害の状況を見ることができます。このことは上の階へ逃

写真 20　門脇小学校正面

写真 21　被害状況

写真 22　地元民は正面の約 2m の塀を超えて逃げる

写真 23　展示　防災教育、日頃の縦割り班の訓練の重要さを展示しています。

げる「垂直避難」にも危険があるという事を伝えています。

防災教育　石巻市の門脇小学校は、12 年前の津波で校舎の 1 階が浸水し、その後の火災の被害も受けましたが、学校にいた児童 224 人は裏山に避難して無事でした。このことは先に紹介した大川小学校と好対照として紹介されます。石巻市はこの門脇小学校校舎を震災の教訓を伝える震災遺構として 2022 年 4 月から公開し、この震災遺構には 1 年で 3 万 9,000 人余りが入館したといいます。

門脇小学校校舎は、校舎全体を残すのではなく、一部を切断する形で保存されていて、倒れた金庫や机が散乱する 1 階の校長室や、真っ黒くこげた児童たちの教室などから津波や火災のすさまじさを感じられるほか、展示館では、教師たちが児童を率いて裏山に避難したルートなどを見ることができます。また、公開後は、小学校の元教員などの当時の体験を聞く無料の語り部を 2 か月に 1 回程度開催しているほか、当時、海の近くにいた人の経験をもとに避難の方法を考えてもらう防災講座を定期的に開いていて、今後も施設は若い世代にも語り部などへの参加を呼びかけ、震災の教訓を伝え続けたいとしています〔NHK 宮城 NEWS WEB より、https://www3.nhk.or.jp/

tohoku-news/20230403/6000023005.html〕。

このように震災遺構門脇小学校は、校舎の火災という状況でありながら、子供たち224人は教職員・保護者と共に日ごろの訓練通りに裏手の日和山に登りました。また、門脇小学校には地元の人たちも多く避難してきました。そこで、上から来た消防隊員と共に写真にもある塀をよじ登って助かったといいます（写真22）。

子供たちに限れば、日頃、年齢を超えた縦割り班によっての訓練が生きたといえます（写真23）。このように小学校児童においては、学年を超えての助け合い共助行動が重要となると思われます。

8）東松島市 震災遺構 旧野蒜駅プラットホーム

概要　東日本大震災の記憶と教訓を広く後世に伝えるため、東松島市は震災遺構として旧野蒜駅プラットホーム（写真24）を残し、さらに祈念広場、震災復興伝承館を設置しました。「東松島市震災復興伝承館」の館内には、被災前後の写真パネルや復旧・復興の状況の展示、また、大型スクリーンがあり、震災当時の記録映像を視聴することができ、防災・減災の取組を学ぶ場として使うことができるといいます。ただ、調査時間が5時を超えていたため、伝承館は終了していました。そこで、旧野蒜駅の視察のみ行いました。

写真24　旧野蒜駅プラットホーム

防災教育　「東松島市震災復興伝承館」は、平成28年10月にオープンして以来、令和2年10月までに12万5千人の入場がありました。これは4年間のデータであり、年に3万人強の入場者があったこととなります。その後の入場者数は分かりませんが、防災教育として役にたっていると思われます。

11 月 27 日

9）名取市震災復興伝承館

概要　名取市閖上（ゆりあげ）4 丁目に設立された「名取市震災復興伝承館」は、かつて約 5,000 人が住んでいた街で、現在は全くの平坦地になった名取市閖上地区にあります。多くの犠牲者を出した資料の展示の中でも「閖上には津波は来ない」という安全神話に関するものが防災教育としては重要でしょう。

東日本大震災において、名取市の死亡者は 965 名であり、そのうち閖上地区では 800 人が犠牲となりました。このことから、なぜこのような多くの犠牲者が出たのかが問題となります。閖上地区の「閖上には津波は来ない」という安全神話がこの原因となったことは十分考えられます。

写真 25　名取市震災復興伝承館

名取市震災復興伝承館の周りは建物のない完全な平坦地になっていて、伝承館の展示では震災前には多くの建物、居宅が存在していたことから、完全に移転したことがわかります。伝承館は平屋で比較的質素な造りです（写真 25）。

防災教育　先に述べましたが、名取市の死亡者は 965 名であり、そのうち閖上地区では 800 人が亡くなるという非常に多くの犠牲を伴い、結果として全戸移転のような形になりました。平坦地であるため、多くの人が車で非難して渋滞を引き起こしたなどの理由が考えられますが、ここでは「閖上は安全だ」という神話について考えておきます。

写真 26 は、閖上地区に今もある、10m ほどの日向山の上にあったという、昭和三陸大津波からの震嘯（しんしょう）記念碑（昭和 8 年）（警鐘石碑）です。ここでは、昭和三陸大津波において幸いにもこの地区は人畜の被害はなかったが、他の地区では甚大な被害があったので、「想うに天災地変は人力の予知し難きものなるをもって、緊急護岸の万策を講すべきは勿論平素用心を怠らず、変に応ずるの覚悟なかるべからず。ここに刻してもって記念とす。」とあります。警鐘はあったのです。しかし、年月の経つにつれ忘れられこの小山の神社脇にひっそりと置かれるようになっていたといわれます。

写真 26　震嘯記念碑（昭和８年）
昭和三陸大津波記念碑、日和山富士神社脇にありました、現在は震災メモリアル公園の一角に設置されています。

この閖上地区では、明治三陸大津波（明治 29 年：1896 年）、昭和三陸大津波（昭和 8 年：1933 年）、チリ地震津波（昭和 35 年：1960 年）、チリ地震津波（平成 22 年：2010 年）といった、三陸海岸を襲って大きな被害を与えた地震津波に無事であったことが、「閖上は安全だ」という神話を生んだのでしょう。これまで安全であったとしても、次回は違うかもしれないということをどのように教え、伝承するか大きな問題だと思います。

文言

地震があったら津波の用心

昭和八年三月三日午前二時三十分、突如強震あり。鎮静後四十分にして異常の音響とともに怒涛澎湃し来たり。水高十尺、名取川を遡上して、西は猿猴園に至り、南は貞山堀広浦江一帯に氾濫せり。浸水家屋 20 余戸、名取川町裏沿岸にありし 30 ㌧級の発動機漁船数艘は柳原園の畑地に押上げられ、小艇の破砕せられたるもの少なからざりしも、幸い人畜には死傷なかりき。県内桃生、牡鹿、本吉の各郡及び岩手、青森両県地方の被害甚大なりしに比し軽少なりしは震源地の遠く金華山の東北東約 150 里の沖合にありて、濤勢の牡鹿半島に遮断せられその余波の襲来に過ぎざりしと、河口の洲丘及び築堤のこれを阻止したるとによるなり。震災の報一度天聴に達するや、畏くも天皇皇后両陛下より御救恤として御内帑金を下賜せらる、聖御の宏大なることまことに恐懼感激に禁へざるところなり。想うに天災地変は人力の予知し難きものなるをもって、緊急護岸の万策を講すべきは勿論平素用心を怠らず、変に応ずるの覚悟なかるべからず。ここに刻してもって記念とす。

昭和 8 年 11 月 3 日

閖上町長他

３．震災遺構調査分析

今回の宮城県における東日本大震災に関係する意向調査において、以下のような点が明確となりました。

(1) 震災遺構、震災遺物、伝承施設について

震災遺構や震災物は、災害の記憶と教訓を後世に伝える重要な要素です。震災で被災した建物や施設、遺跡などが「震災遺構」と呼ばれます。また、震災時に被災した物品や遺品が「震災物」と呼ばれます。また、こうした被災施設や震災遺物を展示し、教育機能を持たせたものを震災伝承館という形で各地にみられました。これらは以下のような概要と機能を持っています。

歴史や文化の物語：震災で被災した建物や施設、遺跡などは、被災地の歴史や文化を反映しています。これらの遺構は、被災地域の歴史的な背景や社会的な構造を理解するための貴重な資料となります。

保存･修復と観光資源化：震災遺構は、保存や修復を行うことで後世に伝えられます。また、その過程で観光資源として活用されることもあります。観光客が訪れることで、被災地の状況や歴史に触れる機会が提供され、地域の復興にもつながります。

教訓の伝承：震災遺構は、災害の教訓を後世に伝える役割を果たします。遺構を見ることで、災害の影響やその原因、そして復興の過程を学ぶことができます。これは、防災意識を高める上で重要な要素です。

被災体験の物語化：震災時に被災した物品や遺品は、被災者の生活や状況を物語ります。これらの物品は、個々の人々の体験や苦労、そして復興への努力を伝える手段として重要です。

博物館や展示施設での活用：震災物は、博物館や展示施設で展示されることが多くあります。展示を通じて、被災体験をリアルに伝えることができ、訪れる人々に深い感銘を与えることがあります。

記録とデジタルアーカイブ：被災者の証言や写真、遺品などは、デジタルアーカイブとして保存・公開されることがあります。これにより、遠方に住む人々や将来の世代も被災体験やその教訓を学ぶことができます。

このように震災遺構や震災物を通じて、災害の記憶と教訓が後世に伝えられること

で、同じ過ちを繰り返さずに済むようになり、より安全な社会を築くための一助となると考えられています。

(2) 防災教育・学習としての教育効果と入場者数、維持費

震災遺構や震災伝承館は比較的最近整備されたものが多いです。震災10年を目途に東日本大震災に関する補助金や復興交付金、復興基金等が、一定の区切りとなる傾向があることが理由でしょう。

震災遺構・伝承施設は災害の教訓を将来に伝える教育施設であるので、入場者数が問題となります。今回、訪問した中で、３）の気仙沼市東日本震災遺構・伝承館（旧気仙沼向洋高校）について、朝日新聞デジタル（2023年4月18日）から入場者数および自治体負担の維持費を見てみます。開館は2019年でこの時は入場者数は8万人で想定より5千人多かったです、20年からはコロナの影響で入場者数は減少して、3.2万人（想定5.8万人)、21年2.14万人（想定4.1万人）でした。コロナの行動制限が解除された22年は5.6万人（想定4.8万人）と上昇しました。入場者数を見る限り、22年度の平均1日入場者数は153.4人であり教育効果は上がっていると言えるでしょう。

ただ、維持費としてみると、入館料は一般600円、高校生400円です。気仙沼市は「被災地の責務」として、年間1,500万円の負担を覚悟して開館させました。しかし、赤字額は19年度1,300万円、20年度には4,000万円、21年度は3,700万円、22年度も3,000万円近くとなります。もともと、こうした震災遺構、震災施設の維持費（今後の修繕等を含む）は市町村がみることになっていて、地域にとってはかなりの負担です。どの地方自治体もこれらの財政的には負の施設を、防災教育施設として未来にわたって長く維持できるかは、わかっていたとはいえ、災害との関係を含み大きな問題となるでしょう。〔入場者数　朝日新聞デジタル　2023年4月18日（https://www.asahi.com/articles/ASR4K6TVRR45UNHB005.html）より〕

(3) 震災遺構・施設について考慮すること

今回の東日本大震災宮城県震災遺構調査で、いくつかの考慮する点が意識されました。訪問者を増やすには：震災遺構・施設は後世の人々に、災害への備えを取ってもらうためのものです。こうした防災教育・学習の実施施設としては、まず施設へ来てもら

わなければ始まりません。今回の調査地の中でこうした訪問者の増加に最も役にたっていたのは、道の駅と震災遺構・施設の併設によりにぎわう、５）南三陸町旧防災対策庁舎、震災伝承施設「南三陸 311 メモリアル」、南三陸さんさん商店街、南三陸町震災復興祈念公園、でしょう。ここでは多くの観光客でにぎわっていました。これは一つの形ではないかと思われました。

避難における学校での訓練について：東日本大震災において、避難行動で最も効果的で目立っていたのは、小中学校の日頃の避難訓練の効果であったでしょう。大人の避難行動は日ごろからの訓練の問題もありますが、「ここまで津波は来ない」や「皆はどうしているか（同調）」、「大事なものは取ってこなければ」などの要因により多くの犠牲が生じました。それに比べれば小中学校の児童生徒、教職員は日ごろの避難マニュアル通りに行動し、大川小学校の被害が目立ちますが、児童生徒の犠牲者の率は極めて少なかったのです。正確な予測に基づく、机上ではなく実地の訓練が重要です。今回の調査での、石巻市門脇小学校では、日頃、年齢を超えた縦割り班によって避難訓練を実施していました。これが実際の緊急的な災害時には大きな力を発揮したといいます。このように小学校児童においては学年を超えての助け合い共助行動が重要となると思われます。

教訓の風化と「安全神話」について：防災教育・学習において、災害遺跡、災害遺構や災害遺物、災害記念碑（祈念碑）及び災害経験の伝承（口承：口頭伝承：口承文化）などは重要なツールでしょう。しかし、名取市閖上地区の震嘯記念碑（昭和８年、昭和三陸大津波記念碑）の例のように、災害後の時間経過とともにこうした災害遺産への人々の関心は薄れていきます（教訓力の風化）。こうした教訓力の風化を防ぐためには、災害遺産の展示などに変化を持たせること、学校のカリキュラムにこうした災害遺産を巡るプログラムを導入すること、地域の防災訓練に取り込むなど効果があると思われます。

また、閖上地区の「閖上に津波は来ない」といった安全神話は、明治三陸大津波を含め４回の大地震大津波において、実際に津波が閖上に来ていないという事実に基づいていたため、かなり厄介なものです。これに対しては、とにかく安全神話があったとしても、非常事態には臨機応変に動くという一般論や、科学的知見として予想される最大津波高や最大震度を住民に開示して注意を喚起するといったことが考えられま

す。一歩踏み込むのであれば、科学的予想と安全神話の乖離を行政や地域住民が意識し、住民への広報活動を強化することでしょうか。

【文献】

・内閣府 防災情報のページ『平成 28 年度版　防災白書』
（https://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h28/honbun/1b_1s_01_04.htm）最終アクセス：2024 年 2 月 1 日

・「災害遺構」の収集及び活用に関する検討委員会　第 1 回会議資料 3　事例の収集例　内閣府
（https://www.bousai.go.jp/kaigirep/past/ikou.html）最終アクセス：2024 年 2 月 1 日

・仙台市 まちづくり政策局 防災環境都市推進室　『震災遺構 仙台市立荒浜小学校』
小パンフレット

・女川町「震災復興のあゆみ」
（https://www.town.onagawa.miyagi.jp/archive/ayumi/ayumi.html）最終アクセス：2024 年 2 月 10 日

・気仙沼市役所「気仙沼市被害の状況」
（https://www.kesennuma.miyagi.jp/sec/s009/020/020/020/1300452011135.html ）最終アクセス：2024 年 2 月 10 日

・「防災のことなら DMA」（https://dma-fmiura.com/entry58.html）最終アクセス：2024 年 2 月 10 日

・山下文男 2008『津波と防災－三陸津波始末』（シリーズ繰り返す自然災害を知る・防ぐ　第 2 巻）古今書院

・宮城NHK NEWS WEB 2023年4月3日「震災遺構の門脇小学校が公開 1 年　4 万人近くが利用」
（https://www3.nhk.or.jp/tohoku-news/20230403/6000023005.html）最終アクセス：2024 年 2 月 10 日

・朝日新聞デジタル　2023 年 4 月 18 日「震災伝承施設の入館者数が 3 年ぶりに想定上回る　コロナ禍回復顕著に」
（https://www.asahi.com/articles/ASR4K6TVRR45UNHB005.html）最終アクセス：2024 年 2 月 10 日